

# 宋太祖酒癖考

荒木敏一

〔要約〕 趙匡胤宋太祖未だ野に在りし頃、世人は太祖が亥歳生れの上に面貌頗る紫黑色を呈していたので「猪」と呼んだ。今日伝われる信ずべき太祖の肖像画に就きて見るに、色黒く首短く肥満型に画かれ、如何にも猪然としている。この猪生來すこぶる酒をたしなみ、遂に酒のために命を失つたという巷間の俗説さえ生じた。すなわち酒毒による背中の腫瘍が命取りとなつたという。

興味深いことには弟太宗は兄太祖と正反對の瘡型で、全く下戸であつたことだ。二人は同腹兄弟であり乍ら、不思議と性格相反し殊に酒の点で懸絶していた。酒を繞つて感情的のいざこざさえ生じる。斯の如く、うまの合わなかつたことから考えると、太祖が太宗によつて弑虐されたという弑虐説(宮崎市定博士)は應、動かすべからざるものとなつて来るが、彼が死に至る経過から推すと病死と考えられないこともない。長編などの記載によると、太祖が不豫となつて死ぬ迄、僅か一夜のうちの出来事であるから、病死とすれば何か突発的で致命的な病気で死んだと見なければならぬ。すると、太祖が平素大の酒豪であり、猪の如く肥満し、顔が赭黒かつた等のことから、大酒豪が辿りやすい一つの突発的な病氣の名が卒然と念頭に浮ぶのである。ただ、その詮案はあくまで附隨的な問題で、主眼は酒を中心として太祖の人物論を展開し、御批判を仰ごうとするものであることは言う迄もない。

のは後唐天成二年(九二)丁亥歳二月二十六日であつた。父

は後唐莊宗に勇武の故に愛され禁軍を典したという豪傑、趙弘殷であり、母は聰明智度あり津水記 開卷一とせられ、皇位継

承問題にも容喙し、太祖―弟太宗―子德昭の順にすべきを誓約せしめたと伝えられる女丈夫、昭憲皇后杜氏であつた。

その第二子として生れた匡胤は、凡器であるが昔はない。生地夾馬營はまた甲馬營とも云われ(後述)、名の示すとこ

- 一、太祖の風貌——猪に類す——
- 二、上戸の太祖——數々の逸事——
- 三、下戸の太宗——兄太祖との性格的相違——
- 四、酒豪の宿命——死因を疑う——
- 一 太祖の風貌——猪に類す——

河南洛陽東北郊なる夾馬營に趙匡胤が呱呱の声をあげた

ろては、兵舎衛と見て大過はあるまい。桑原隲藏博士かつて洛陽に遊ばれ、この地に夾馬營と題する大碑が蔵存した由、述べていられる<sup>①</sup>。夾馬營は、別にまた火燒衛とも香孩児衛とも称せられる<sup>②</sup>。その名の由来は、太祖の生誕の際にまつわる一つの言い伝え——赤光は室を繞り、異香経宿して散ぜず、体に金色有り三日、変せず宋史卷一 太祖本紀に基くといふ。又、第三代の真宗、此地に応天禅院を建てたと伝う<sup>③</sup>。

さて太祖は右述の如く亥歳生れて長じては容貌雄偉器度豁如<sup>④</sup>、いわゆる純粹の武人型であつた。中国史上同じ亥年生れて武人型の天子をもとむれば元の世祖があり、国史の上では秀吉の歴史的立場とよく似ていると宮崎博士はかつて比定されたことがある<sup>⑤</sup>。これは面白いとえだと思つて、注意して諸書を見ていると、両者は歴史的立場が似ているばかりか性格も似ている様に思う。ここでは詳しくは述べないが、長編、涑水記聞、宋人軼事彙編以下の諸書を通じて見たところでは後節にのべる太宗との比較表の外、太祖の人物評としてしばしば諸史に出くわす語は「聰明豁達、人を知り善く任ず」、「神武機權」、「孝心友愛」、「節儉」、「嬌飾を事とせず」、「寬仁多恕」、「英武」などで、歐陽脩

も「太祖神武英斷」と評している<sup>⑦</sup>。又政策は機智にとみ屢々微行して近臣の注意をうけるなど（涑水記聞卷一）、秀吉の庶民的なところと一脈相通じ、しかも秀吉が「豊太閤」として絶対的な国民の信愛を博したに對し、太祖も「太平天子<sup>⑧</sup>」と人民の謳歌を受けている。ところが、唯一つ似ていない点がある。それは容貌である。秀吉は猿といわれたが、太祖は猪と呼ばれた。すなわち滑稽稼軒堅瓠六集卷一に「芸祖属猪」ありて曰く、

（後）周駙馬張永徳好みて方士を延く。嘗て異人あり言らく、「天下將に太平ならんとして真主已に出ず」と。永徳「誰ぞ」と問うに答えて曰く「ただ紫黑色にして猪に属する人を親ば、宜しく善く之を待つべし」と。徳永芸祖（太祖）の勲位漸く隆かきを見て、其の英表を識り、其の生年を問うに亥に在りと。乃ち身を傾けて親附す。宋初旧恩を以てし礼貌は芸祖の世を終うるも、これ少も替ること莫し。潘紫南、閩南に陳（陣）して野睡するの図に題して云う、

甲馬營中、紫氣高し、

猪に属するの人、已に黄袍を着く、

此の回天の下と、都て無事ならん、  
是れ山中に睡りて牢を得たるなるべし。

右引用文前半は説明を要すまいが、最後の潘紫南の詩は意味深長で、注意すべきである。第一句甲馬營とは夾馬營のこと、宋朝事實<sup>一</sup>、皇朝編年綱目備要<sup>二</sup>では、太祖の生地を甲馬營と記している。夾馬・甲馬二通りの呼び名があつたらしいが、しかし今迄見たところではこの二書だけ甲馬としているに過ぎない。宋史、宋会要稿その他の諸書隨筆いづれも夾馬としているに従うべきだろう。紫氣高しとは天子たるべき匡胤が生れたことをいい、第二句猪に属するの人すなわち太祖が天子となつたことを指し、第四句山中（陳橋駅）に眠りて猪が牢（天下）を得たのだと云つたのは巧みな縁語をつかつたものと思う。

太祖の面貌が黒かつたことには別に一証あり。統資治通鑑長編<sup>卷二三</sup>仁宗宝元二年五月己酉に

知枢密院事王德用、状貌雄偉にして面黒く頸以下白皙なり。人皆之を異とす。其の居第は秦寧坊に在りて宮城の北隅に直る。開封府推官蘇紳嘗て疏すらく  
徳用の宅は乾岡を枕にし、貌は芸祖に類す

と。帝其の疏を匿して下さず。御史中丞孔道輔繼いて之を言う。且つ謂らく

徳用は士心を得たり。宜しく久しく機密を典せしむるべからず。

と。壬子、罷めて武寧節度使と為し本鎮に赴かしむ云々

右文に見ゆる傍点の部分に注意したい。王徳用は顔が黒くて芸祖すなわち太祖に似ていたことを、蘇紳・孔道輔の二人まで口を揃えて言つている。そこで、この事實から逆に推すと、太祖の容貌も黒かつた事を察するに難くないのである。

次に、現存している太祖の肖像画三幅について見ると、矢張り顔は黒く画かれている。最近台湾からの大陸雜誌

<sup>第六卷第十期中</sup>華民国四十二年に李霖燦氏の「論中国之肖像画」があり。曰

く、国立中央博物院が前古物陳列所の文物を接收した中に、歴代帝后像一批（六十九幅）あり、うちに宋太祖像は三幅ある。大体中唐のものは出来はよくないが宋元以降のは確かである。宋の帝后像は尤も傑作である。太祖三像のうち一は武士の風装で小幅だが極めて英武の状が現われている。後周

に仕えて殿前都点檢(近衛卿)たりし時の肖像らしい。他の一幅は坐像、別の一幅は半身像で、即位後の壮年・晩年のものらしいと。そして注意すべきは容貌の点について

面部は赭黒色を作り、人情意味豊沛たり。此の三像、皆極めて佳なり。

といい、顔が黒く画かれています事を知るのである。この帝后像は元來北京宮中の南薰殿にあつたもので、それが故宮博物館にうつされ、更に李氏の言によれば戦後台湾に接収されたらしい。この帝后像について内藤博士は「宋以後肖像専門の画家が出て成るべく似させようとした。(中略)宋以後の天子と皇后の像は強いてその肖像を画かんとした跡がある」と云われ、かえつて生氣が失われたことを指摘して

いられる。氣韻を尊ぶ東洋人物画の精神から云つてこれはたしかに墮落である。しかし、それは却つて又、西洋的な写真主義に近いものが、宋の帝后像に見られることを示し、従つて太祖像も眞容に近いことを物語り、面部が赭黒色に作られていたのは、實際太祖の御容がそうであつたと見てよいであろう。因みに太祖が「周世宗、諸將の方面大耳の者は、皆之を殺せり。然れども我終日側に侍れど

も我を害すること能わず。」涑水記と云つたのは有名だが、太祖は正に方面大耳であつた事は面白い。古來「面、方にして田の如し」は封侯の状とされている。(註)蓋し世宗は太祖に気がつかなかつたのであろう。

## 二 上戸の太祖——数々の逸事——

涑水記開卷一に曰く

朕(太祖)つねに宴会により、飲に乘じ酔に至りて、  
経宿するも、未だ嘗て自悔せずと。長編卷二建隆二。年閏三月同之。

宋史卷二王審琦伝に太祖の言を載せて

酒は天の美祿なり、と。

この二つの言葉で太祖が如何に酒を愛好したかを察するに難くないが、以下諸書に見ゆる酒に関する太祖の数々の逸事をあげ、事実として裏付けて行くことにする。先づ在野時代の逸事から見よう。

太祖には少くとも二人の酒友があつた様で一人は道士張守真、一人は建雄節度使贈侍中趙彥徽である。長編卷一七開宝九年十月条所引の吳僧文瑩湘山野録に曰く、

祖宗潛躍の日、嘗て一道士と関河に遊ぶ。定まれる姓名

なし。自ら曰く混沌、或は又曰く真無なりと。つねに乏しきこと有らば囊金を探る、愈々探ぐれば愈々出ず。三(二)人劇飲する毎に爛酔す。云々

と。長編によれば右の道士は張守信であらうという。張守真は熱産県の民で、後、道士となり、太祖不豫となつて開宝九年十月死ぬ間際、召されて闕下に至つてゐるから、非常な信用があつた人物と思われる。右文より在野時代から親交あつたことは明らかであるから、まづ酒友の一人と数えてよいであらう。長編卷十七開宝九年冬十月

今一人は趙彦微である。太祖の後周世宗任時代に兄とよんで親しくしていた人物で、太祖即位するや、わざ／＼呼びよせて、拔擢して旄鉞を領せしめたといふ(建雄節度使贈侍中たり)。

この人生来の酒好きであつたと見えて開宝元年過度の飲酒がもとで死んでゐる。その時、太祖は親しくその第宅に幸して錢百万を賜うた。生前彼が上京すると酒宴を開き寵顧甚だ厚かつたこと、太祖が兄と呼んだことから推して、二人の交友は可成り深いものであつた事が察せられ、第二の酒友として敢てあげた次第である。

次に在野時代の太祖の酒をめぐる二挿話を紹介せんに石

林燕語一巻に曰く

太祖微なりし時、嘗て酒を被りて南京(応天府)高辛廟に入る。香案上に竹栝筵(竹をもつてつ)あり。因て取りて以て己の名位を占う。俗に一俛一俛を以て聖筵聖筵となす。小校より以上節度(使)に至るまで皆、応ぜず。忽ち曰く「此を過たば則ち天子たらんか」と。一擲して而して聖筵を得たり。

と。

また涑水記聞五巻に曰く、

太祖はじめ周世宗に瀘州に事う。「曹」彬世宗の親吏となりて茶酒を掌る。太祖従つて酒を求む。彬曰く「此れ官酒なり。敢て相与うべからず」と。自ら酒を沽いて以て飲ましむ。

と。曹彬も可成り愛酒家であつたらしいことは曹彬が太祖の命をうけて江南を討たんとするその出発に際し、曹彬を一夜禁中に召して親しく酒を飲んで飲ましめたところ、酔いつぶれて前後不覚となつた。そこで宮人が水を汲んで来て彬の顔にぶつかけたらやつと気がついた。太祖は彼の背中をたたいて「しつかりせよ、しつかりせよ」と元氣づけ

たという。<sup>⑩</sup>

次に太祖が建隆元年(九六〇年)禁軍の諸將に推されて陳橋駅で黄袍を加えられたことは周知の事であるが、そのときも酒に酔つていたらしく。

長編卷一建隆元年春正月癸卯の条によれば、太祖は殿前都点検として近衛軍をひきいて北伐の陣を陳橋駅―開封の北―に張つたそのある晩のこと、かねて幼主恭帝(七才で)を戴いて戦うことの不安から匡胤に平素親服せし諸將の間に匡胤擁立の下相談が出来ていた。浚儀や石守信など錚々たる武將の面々が太祖の寝所を取り巻いて、夜のあけるのを待つたと言う。そのとき匡胤は前夜来酒を飲んでぐつすり寝ていたらしく、この長編の記すところによれば「諸將環立して且を待つ。太祖臥酔しては、はじめ省らず。黎明四面より叫呼して起つ。声原野を震わす」とあるから証拠歴然である。何事ならんと太祖二日酔の顔で着物もそこへ外に出ようとした途端、有無をいわず黄袍を加えられたというのが実情らしい。先掲潘紫南の詩の中に、山中に睡して牢を得たとあるが、更に詳しく言えば山中に臥酔して牢を得たというべきであらう。

次に酒好きの太祖が酒の密醸取締りを緩にしたこと、及び酒の上での臣下の失儀は緩大に処置したことについて述べよう。

五代後漢の初期には私麴を犯するものは量の如何を問わず棄市され、後周太祖は五斤に至れば死に処するなど、ヤミ酒の取締りは五代に於て頗る厳であつた。しかるところ、宋太祖に至るや右より大巾に取締りを緩にし、まづ建隆二年(九六一)すなわち即位の翌年詔して

私麴を犯すこと十五斤、私酒を以て入城するに三斗に至れば、始めて極典に処せん。其餘は罪を論ずること差あり。私に酒麴を市ぐものは造る者の半ばを減ぜん。<sup>⑪</sup>

とし、ついで一年後建隆三年(九六二)には、更にこれを緩にして、酒麴の取締りは都会地では二十斤、村落では三十斤に至れば棄市とする。ヤミ酒運搬の罪は五斗に至れば死刑、また一定の里数ごとに分ちて官署を設け、酒を発売せしめること、及びヤミ酒をその所在地に一石運べば棄市することにした。<sup>⑫</sup>これは以前より大分緩い。ところがその四年後の乾徳四年(九六三)には、右を更に緩くして、私に酒麴を造る者、都会は五十斤以上、村落は百斤以上、ヤミ酒を禁

地に運ぶものは二石乃至三石以上、官署所在地に運ぶものは四石乃至五石以上の者、死罪とする事に改めた<sup>⑧</sup>。かく取締りが緩くなつたが、その結果如何なりしやと云うに、興味深いことには「法益々軽くして、犯す者、鮮し<sup>⑨</sup>」の状態であつたという。これは色々原因が考えられるが、直接には安い官酒が多く市場に出廻つた為と見るべく、或いはこれも上戸の太祖が酒の大増産を笑施した為かも知れない。

次の逸話は翰林学士中書舎人の王著と太祖に関する話。王著は酒好きで、とかくの行動があつた。ある日、酒に酔つて、夜娼家に宿つたところを巡吏がやつて来て現場を押えた。別段詮議のことなく釈放されたが、密に事を以て上聞する者ありしが、不問に附したということあり<sup>⑩</sup>。

また太祖かつて広政殿に宴を開いたとき太子太師王溥、太子太傅武行徳、金吾衛上將軍王彦超の三人が「皆酒に酔いて儀を失い、御史の劾奏するところと為つた」が、太祖は詔して之を釈したということあり<sup>⑪</sup>。酒好きの天子が上戸の臣下に理解があつて、大目に見たと解すべきであらう。

また太祖かつて權侍衛歩軍司事保寧留後の王繼勳に向つ

て、「此の軍(雄武軍)は新しく募つた軍だから、恐らく兵士には妻帯してないものが居るだらう。故に若し願ひ出て婚をなさんとする者は、聘財など備うべきではない。但だ「酒炙は可なる耳」と言つた。ところが、繼勳はこの太祖の言葉の意味が判らない。恣に部下兵士をして子女を掠奪させた。之がために町々は非常な紛擾を生じたと言う。太祖これを聞くや大いに驚き、即ち命じて兵士を捕えしめ、雄武軍の兵卒百余人を斬つたと云う珍事があつた。この「酒炙」の意味は、酒とさかなの意である事は云う迄もないが、くだいていえば、一ぱい飲むことで、聘財は禁止だが、その代り一杯飲むことは許すという意味である。上戸天子の親心とも称すべきである。

次に太祖は酒宴をひらいて重要会談を行つたことが少くない。その第一は酒杯のうちに諸將の兵権を解いたことで、太祖の逸事でもつとも有名である。十八史略にものせられている程だが、聶崇岐氏もすでに「論宋太祖收兵権」中にはじめの所に、一節を設け酒杯のうちに兵権をといた次第を取上げている<sup>⑫</sup>。太祖は即位の翌年に禁軍の大將を一度に誅首するが、その方法は石守信、高懷徳、王審琦、張令鐸

などを集めて酒宴を開き、宴酣なるに至つて左右をしりぞけて、おもむろに切り出した。曰く、「人生は白駒の隙を過ぎるようなものだ。諸士はどうして七面倒な兵権を返上して、気楽にくらす事を考えないのか。財を蓄え、舞姫歌児などを養つて、日日酒を飲み、相喜び、楽しく人生を送る工夫をしてはどうか、それがお互によいではないか」と話を巧みに持ちかけ納得させ、まふまゝ兵権返上に成功した。かくていわゆる君主独裁、中央集権化の第一歩が見事に切られるが、このとき太祖が酒の力を用いて納得させ、その言葉に「日日酒を飲みて相喜ぶ」ようすすめたのは如何にも太祖らしい。

第二はある雪の晩、おしのびで宰相趙普の家を訪れ、普の妻の焼く肉とお酌で、一杯やり普の妻を嫂さんなど呼び乍ら、その席で、北漢を後廻しにし江南を討つべきことを普と相談し決定した<sup>(長編 卷九)</sup>。

併しここで附言しておきたいことは、酒好きでも、贅沢三味はやらなかつた様で凍水記聞<sup>(卷一)</sup>に「太祖性節慎」とあり、また後宮の費用を切りつめ<sup>(長編 卷二)</sup>自ら質素の範を垂れる<sup>(長編 卷三)</sup>などしている。

### 三 下戸の太宗——兄太祖との性格的相違——

弟太宗はもと匡義といい、太祖即位するや光義と改め、開宝六年<sup>(九七三年)</sup>晋王に封ぜらる<sup>(王の位は宰相の<sup>⑧</sup>上と定めらる)</sup>。兄太祖

と同じく昭憲皇后杜氏の腹、父弘殷の第三子である。五代の兵乱をさけて母后は二人の兄弟を籃の中に入れて、逃げ歩いたと伝えられる<sup>⑨</sup>。長じて兄太祖から非常に鍾愛された

<sup>(長編 卷一七開)</sup>。ところが太宗は兄をそれほど親愛しなかつた様である。太祖死後、太祖の実子実弟に対する太宗

の態度は冷たく太祖第二子德昭は太原征伐の論功行賞を太宗に促し拒否されるや自殺し<sup>⑩</sup>又第四子德芳は若くして<sup>(二十才)</sup>死し、又太祖の三弟秦王延美は不軌を謀つたという

疑を太宗にかけられ涪陵県公に左遷され、その後間もなく髪を以て世を去つている<sup>⑪</sup>。太宗の長子楚王元佐は延美の冤をいひ救わんとするも太宗きかず、延美死するに及び発狂して暴行やまず庶民に下されるなど、太祖死後、面白くないことが続出している。これらの事件は太宗を名君とする通説のままに、政治の事蹟<sup>(海内 統一)</sup>のかけにかくれているが、実情は右の通りであつた。或いは太宗の人物が磊落英



武な太祖と相反していたことに一半の原因が求められはしないか。〔かつて宮崎博士は太宗の歴史的地位が我が国史

上の家康に似ていることをいわれた。〕性格も次にかかげる如く、太祖太宗は正反対の点が多い。

| 想思                             | 書説愛                           | 味趣                            | 格体          | 格性                                  |  | 太<br>祖 |
|--------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|-------------|-------------------------------------|--|--------|
|                                |                               |                               |             | 寛豪機野武庶上                             | 仁智智人人民   |        |
| 道士を信ず                          | 漢書張釈子伝                        | 敗獵を好む                         | 肥満型<br>黒し   | 寛仁多恕                                | 豪放<br>機智明朗<br>野人型<br>武人型   | 太<br>祖 |
| 長編卷一七                          | 漢文帝の廷尉として有名、治獄の状に感激す(長編卷一四)   | 開宝八年九月にそれまで好きであつた敗遊を止む(長編卷一六) | 帝后像による(及既述) | 近臣の過失をとがめず(長編卷一六)                   | 拙稿(東洋史研究八卷四号)<br>歐陽脩の言葉(長編卷一三六)<br>英武(長編卷四)<br>徽行をこのむ(名臣言行録卷一趙普) | 典<br>拠 |
| 仏教と老荘を好む                       | 漢書賈誼伝                         | 敗獵を好まず                        | 瘠型          | 偏狭小量                                | 真面目型<br>稍優柔<br>天子型<br>文人型  | 太<br>宗 |
| 「上皇崇釈教」(長編卷二三)及吉田「北宋全盛期の歴史」頁三五 | 漢文帝の宰相「今賈誼の如き忠臣なきやと歎す」(長編卷二九) | 「鷹犬煨素所不好」(長編卷三〇)              | 帝后像による      | 廷美を疑ひ、徳昭を怒らず、兵士に対し差別的な感情をいだく(長編卷二四) | 「朕毎日所為有常度」(長編卷二五)<br>完成された天子の趣あり                                 | 典<br>拠 |
|                                |                               |                               |             |                                     | 皇后四人、嬪妃九人(皇宋十朝綱要卷二)  |        |

| 政  | 策   | その他   |
|--|---|---|
| <p>官吏小數嚴選主義</p> <p>精兵主義</p>  | <p>寬刑</p> <p>用兵巧妙</p> <p>愛惜官爵</p>           | <p>太祖洛陽に生れ、その風土を愛す、故に洛陽遷都の意あり。太宗の反対をうけて中止す（宋朝事實卷一長編卷一七）</p> |
| <p>進士及第數少し</p> <p>後周世宗の策をつぐ、禁軍二〇万〔宮崎、東洋における素朴主義〕</p>   | <p>「鑿囚皆空」の字しばしば見ゆ（長編卷一五、六）</p> <p>長編卷一七</p> |   |
| <p>官吏多數主義</p> <p>多兵主義</p>  | <p>俊刑</p> <p>「用兵不如太祖」</p> <p>朝恩を普く行う</p>    |   |
| <p>進士及第數急増す、及長編卷一八「薛居正の言葉」</p> <p>太宗のとき禁軍は太祖時の二倍となり、同時によわくなる</p> <p>〔江浙〕部内鑿囚滿獄（長編卷二三）</p> <p>長編卷二三七神宗の言</p> <p>〔科擧政策に現る〕</p> |   |   |

以上のうち、著しいのは酒の点で、太宗は全く太祖の正

反対の下戸であつた。長編卷二 雍熙元年春正月乙丑に

朕居常罕れに飲む。

といひ、また同書卷二 雍熙二年十二月乙未に

春夏以来、未だ嘗つて飲酒せず

といひ、殊に後の文は十二月の記事だから、春以来飲ま

ぬとは中国の天子ともあろうものが、一年近くも酒を飲ま

なかつた事を示しこれは余程下戸の人でなければ出来ない

ことである。又長編卷三〇端拱二 には太宗について

上は塩湯を以て酒に代え、常に洗濯の衣を服し、鷹犬の

娛、素より好まざる所なり。

とあり、右は太宗の節儉振りを示したものであろうが、そ

れにしても塩湯を以て酒に代えるとは尋常の人では到底な

し得ない所で、如何に太宗が徹底した下戸であつたかを示

している。また「朕飲食は度を過ごすことなし」（長編卷

熙元年春）とも見える。太祖が二日酔いも辞せぬと言つてい

るのと非常な相違である。果して酒をめぐつて太祖と太宗

とが非常な感情の疏隔を来した一つの事件が起つた。宋人

軼事彙編卷一太祖条下に聞見近録の記事が載せて

金城夫人幸を太祖に得たり。一日、後苑に宴射す。上

(太祖) 巨觥オホサカウヅに酌みて以て太宗に勸む。太宗固辞す。

上、復た之を勸む。太宗庭下を顧みて曰く「金城夫人親しく此の花を折りて来らば、乃ち飲まん」と。上、遂に之に命ず。太宗弓を引きて之を射殺す。即ち再拜して泣きて太祖の足を抱きて曰く「陛下方めて天下を得たり。宜しく社稷のために自重すべし」と。上、飲射すること故の如し。

と。右文相当の記事が他の史書に見えず、金城夫人に就いても史料なく不明であるが、この記事によつて太祖太宗が酒のことで深刻に感情的に疏隔していたことを知る。酒を自重する様太宗が兄にすすめたが、弟太宗を鍾愛した兄太祖も酒の点では譲れなかつたと見るべきであろう。

#### 四 酒豪の宿命——死因を疑う——

太祖の死は宋史卷三太祖本紀によれば

開宝九年癸丑夕帝崩於万歲殿

とあり、その前後に病氣になつたという記事はない。しかるに長編卷七一開宝九年冬十月の条に

上不豫。朕召「張」守真至闕下。壬子、命内侍王繼恩、就建

隆觀、設黃醞。令守真降神。……上即夜召晋王属以後事。左右皆不得聞。但遙見燭影下。晋王時或離席。若有遜避之状。既上引斧柱地。大声謂晋王好為之。癸丑上崩于万歲殿。時夜已四鼓。

とあつて発病から崩御までを記しているが、上不豫を何日だと明記していない。御批歴代通鑑輯覽にあつては、長編のこの「上不豫」の一句を次にかかげる如く、壬子の下に  
おいてゐる。すなわち「開宝九年冬十月帝崩。晋王光義即位」の下の註に

李燾長編云。壬子、帝不豫。夜召晋王属後事。左右皆不得聞。但遙見燭下。晋王時或離席。若有所遜避之状。既而上引柱斧戮地大声謂。晋王好為之。已而帝崩。

とある。思うに長編の書き方が曖昧であるために、壬子発病し、一夜のうちに崩御されたと輯覽では考えたと解せられる。また皇朝編年綱目備要卷三は長編によつたらしいが、上不豫の日付は何日とも書かず、「至是不上豫。壬子召晋王属以後事。癸丑上崩」としている。長編の「上不豫」を該記事の前の記事——その日付は庚戌だが、それにかける事は不可能である。現に庚戌上不豫としている史書はない。

そこで結論として輯覧の如く不豫から崩御までは一日以内のこととし従つて太祖は急な致命的な病で崩じたと解したい。(康熙帝は弑虐説を否定して、燭影斧声は信ずべからずとし、長編の弑虐を暗示する如き書き方は太宗にぬれ衣をかけるものだとしている 御批歷代通鑑輯覧卷七十二 また酒毒のため背中に癰疽を発し、これが命取りとなつたという説は「宋太祖征南唐」とう回章本の第五十三回「病癰疽太祖駕崩」に見えるが、この書は著者も年代も不詳の史料価値なき俗書であるから採るに足らぬ。そこで最後に卒然と思出されることは太祖が猪の如き肥満型で顔が赭黒くて非常な酒好きであつたことである。かかる体質、かかる酒豪の人が病死しかも一日位の急病で死んだとすれば、その病名も自ら想像がつく。ただしこれは弑虐説を否定する程の力のない単なる試論の域を出ない事をこゝわつておく。

(三〇・七・二三)

- ① 桑原隲蔵「考史遊記」頁一〇
- ② 右書頁一〇
- ③ 澠水燕談卷一
- ④ 宋史卷一太祖本紀
- ⑤ 宋人軼事彙編卷三(頁一〇二)

- ⑥ 宮崎市定博士宋太祖の弑虐説について東洋史研究新一巻四号
- ⑦ 続資治通鑑長編卷一三六、慶曆二年五月甲寅
- ⑧ 右書卷一七、開宝九年夏四月庚子
- ⑨ 内藤湖南博士「支那絵画史」頁九二—九三
- ⑩ 南齊書卷二七李安民伝
- ⑪ 続資治通鑑長編卷九開宝元年五月丙午
- ⑫ 宋名臣言行録卷一、曹彬
- ⑬ 続資治通鑑長編卷二、建隆二年四月壬戌
- ⑭ 右書卷三、建隆三年三月
- ⑮ 右書卷七、乾德四年十一月癸丑
- ⑯ 右に同じ
- ⑰ 右書卷四乾德元年二月甲申朔
- ⑱ 右書卷一一、開宝三年二月丁酉
- ⑲ 右書卷六、乾德三年十一月庚午
- ⑳ 群崇岐「論宋太祖収兵權」燕京學報第三十四期
- ㉑ 続資治通鑑長編卷一四、開宝六年九月己巳及壬申の条
- ㉒ 古語諺引神仙伝「宋人軼事彙編」卷一、太祖
- ㉓ 皇朝編年綱目備要卷三太平興國四年八月。長編卷二〇亦同
- ㉔ 右書卷三、長編卷二二、太平興國六年三月
- ㉕ 続資治通鑑長編卷二五、雍熙元年正月乙丑
- ㉖ 右書卷二六、及び皇朝編年綱目備要卷三
- ㉗ ⑨と同じ

As the public ownership of Mines was a principle of the Edo Government, part of the products of the Innai mines was presented to the Government. However, the whole amount of this tribute (Unjoshoyak 運上諸役) was repaid later. The amount of the tribute was being gradually reduced for the thirty years following the opening of the Innai mines, and then still faster. Since early eighteenth century, the annual tribute came to be fixed as 1,400 monme (匁). In parallel with this, the system of enterprises were getting reformed and many of governmental mines were trusted to private capitalists. At the beginning of last century, the total amount of output even exceeded 5,000 kg.

The population of the silver mine town (銀山町) was as much as 10,000 in 1660. It might have been twice as much when the town was the most prosperous. There were various groups of workers and technicians, coming from all over Japan, especially from Edo, Osaka, Kyoto, Ise, Omi etc. After the battle of Sekigahara (関ヶ原の役), unemployed warriors gathered there, wishing to be an explorer or a law official. This kind of town, where people of all sorts of professions from all parts of the country suddenly poured in and moreover dependent on the unstable economical condition of mining industry—had certainly, features entirely different from that of other more common towns.

## T'ai tsu (太祖) of Sung (宋) and Liquors

By

Toshiichi Araki

T'ai tsu (太祖), Chao k'uang yin (趙匡胤), emperor of Sung (宋) Dynasty, was born in a certain Boar's year, and, moreover, was very fat and had a red face. His subjects called him "Boar". The traditional portraits of the emperor certainly legitimate this name. He loved liquors and was said by some to have died of too much drinking. On the contrary, T'ai tsung, (太宗) his younger brother, was rather skinny and entirely avoided liquors. Besides, these brothers were much different in character, and often misunderstood or even hated each other. If we press this much farther, we would be likely to admit the theory of Pr. I. Miyazaki (宮崎市定) that T'ai tsu was murdered by T'ai tsung. However, if we closely examine his health condition in his later years, it is not impossible to agree with those who conclude his death as a natural but sudden death because of his love for liquors as mentioned above.

At any rate, the cause of T'ai tsu's death is not the main subject of this essay. We have discussed the character of T'ai tsu, especially from the viewpoint of his love for liquors, in various ways and request the criticisms from the side of the readers.